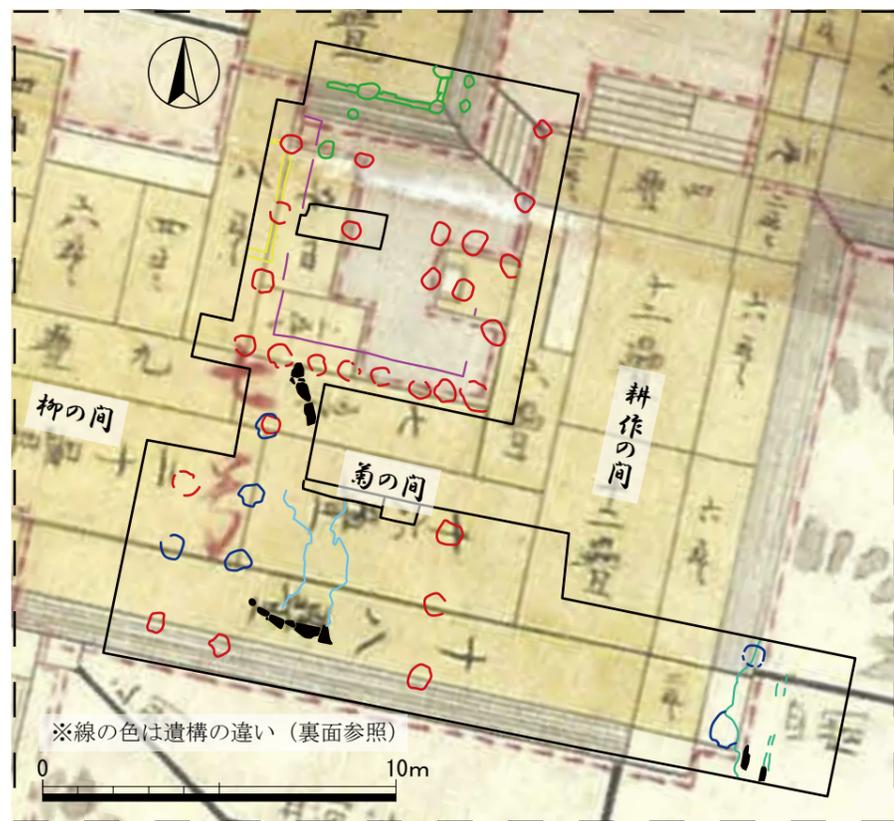




久留米城本丸測量図
 これまで4回発掘調査を実施しています。これまでの調査については、小冊子『あなたの知らない久留米城』をご参照ください。

絵図*と調査位置



絵図*と調査位置 (拡大)

調査区北西の礎石部分を中心に絵図*と照合した図。確認された柱等の位置がおおよそ絵図と重なる。調査地は本丸御殿の北東部、柳の間、菊の間、耕作の間の周囲にあたる。

※富原道晴 2017「第四章 九州編・その他 110、久留米城福岡県久留米市」『富原文庫蔵 陸軍省城絵図 - 明治五年の全国城郭存廃調査記録』戒光祥出版

くるめじょうほんまるあと
 久留米城本丸跡発掘調査
 (第4次調査)

現地説明会資料

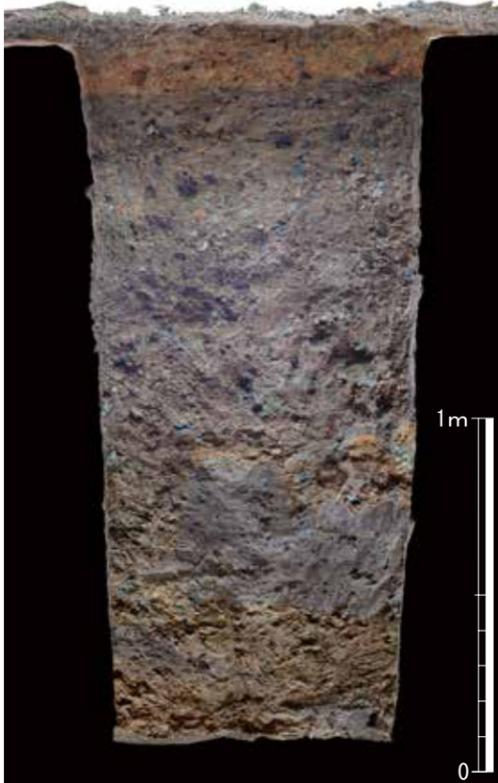
令和8年1月24日 (土)



久留米城の範囲 (『久留米市街図』 天保年間 (1830 ~ 1844))

①造成土

一部を深掘りし、本丸御殿を建てる以前の造成土がどのように堆積しているかを確認。種類の異なる土が何層も重なり、全体的に青緑色の石（緑泥片岩？）の破片を土に混ぜたり、上層では砂、粘土の層を交互に積み固めたりすることで、地盤を強固にしている。



造成土の土層

地山まで掘ることができなかったが、この場所では少なくとも2m以上の土が積み重ねられている。



⑥丸瓦の区画

丸瓦を並べた「コ字状」の区画が確認された。西側に延びるため詳細は不明である。④が重複し、一部欠損している。また、⑤以前の土が上に覆っていたため、⑤より古い時期と考えられる。建物以前の構造物と考えられるが、詳細な用途については不明である。

②～④建物の基礎

建物の柱等の基礎部分。柱の下の礎石（②）、礎石の下の根石（③）、素掘り（④）の3種類の基礎が確認される。基礎の違いは、時期差や建物の構造、用途の差等が現れている可能性がある。他の遺構と重複する箇所（③や⑤、⑥と④の重複）があり、増築していったこともうかがえる。間隔が狭い箇所は柱ではないと思われる。



②礎石と地覆石

丸い石が柱を据える礎石、長方形の石が建物最下部に取りつける横木を載せるための地覆石。



③根石

5～10cm程度の大きさの河原石を円形に固めている。礎石を安定させる役割を持つ。

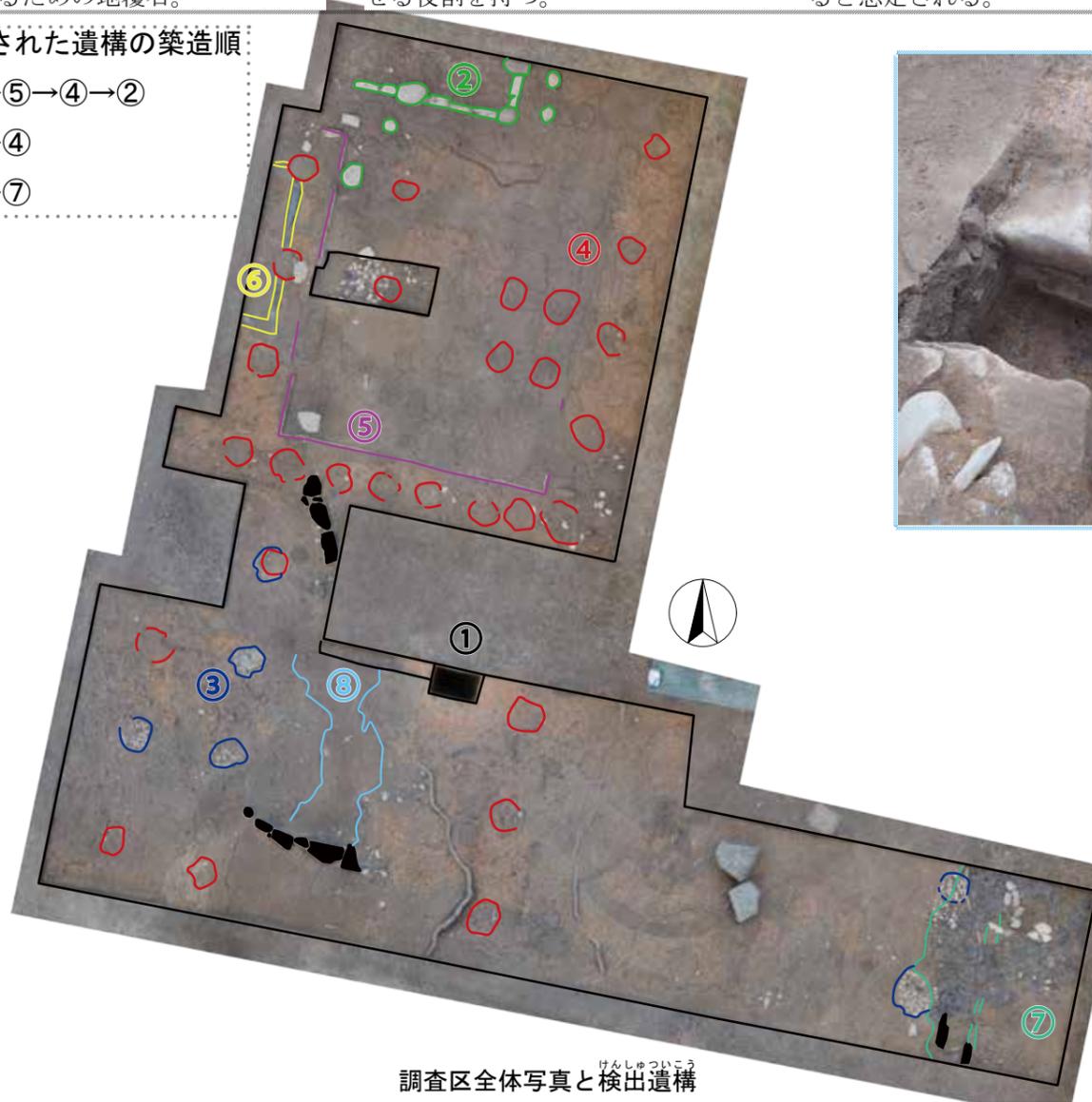


④素掘りの穴（白色破線部分）

元々は礎石が据えられていたと思われるが、根石ともども失われていると想定される。

確認された遺構の築造順

- ・⑥→⑤→④→②
- ・③→④
- ・③→⑦



調査区全体写真と検出遺構

⑤板石による区画

高さ、幅ともに30cm、厚さ2～3cm程度の板石を並べて区画を成す。南部分は建物の外に、建物と平行して並べられている。詳細については不明だが、建物の内外を区切る仕切り等の可能性が考えられる。部分的に石列が失われている部分があるが、土質の違いなどから直線的に境がみられる。西部分では建物の内側に入るが、この部分は建物が増築されたと考えられる。深掘りした箇所では10～15cmの丸い石や瓦を敷いている。南部分では確認できず用途は不明である。



石列南西部

江戸時代の面から2～3cm程度の高さが見えている。北側（左）の石がない。

⑧溝

石組みの溝。南西部分は直線的ではなく、緩やかに方向が変化する。時期は不明であり、建物内にあたるため、廃城後に築かれた構造物である可能性もある。



⑦瓦の集中部

調査区南東部で多量の瓦が出土した。一部、柱基礎と上に広がるが、想定する建物の外側に集中しているため、本丸御殿を解体した際に廃棄された瓦の可能性はある。